

幻の書

酒井桂史『琇玉篇』 解題

金子義隆

第四十三番

9	8	7	6	5	4	3	2	1
				龍				一
					と	銀	皇	歩
							銀	三
					皇		香	四
								五
						王		六
								七
					香	龍	金	八
								九

持駒 角角金金銀

A 15角、同飛、25金、イ同玉、16銀、同飛、43角、35玉、34角成、26玉、16馬、同玉、13飛、15歩合、17金打、25玉、14銀生、35玉、33飛成、34金合、

同龍、同玉、43銀生、35玉、34金まで
25手詰

A 35角(銀)、同玉、34金、25玉、14銀生、同玉、23銀打(角)、同香、同銀生、25玉、16角、同玉、17香以下。

A 25金、同歩、15角、同玉、33角、24金合、14銀成、同玉、23銀打、同香、同銀生、15玉、17香以下。

イ同歩は、35銀、同玉、24角、26玉、15角、同玉、14飛、26玉、16金以下。

玉方飛車を質駒化する狙い。51龍はなくても作意、変化に影響はない。34金合を限定するためだけにしては勿体ない配置だが。

図面右肩に「B 19」のメモ。

第四十四番

9	8	7	6	5	4	3	2	1
					香		香	一
	と				王			二
			香	香				三
						王		四
	香	と				桂		五
	銀				桂			六
								七
			皇	桂				八
	馬							九

持駒 飛銀桂歩

43銀、51玉、52飛、61玉、73桂、同飛生、A 62飛成、同玉、B 52銀成、同玉、34馬、62玉、54桂、同歩、53銀、同玉、43桂成、64玉、65歩、同玉、56馬、64玉、74と、同飛、同馬、同玉、75飛、64玉、56桂まで29手詰

A 51飛成も可。
B 54桂、同歩、52銀成も可。

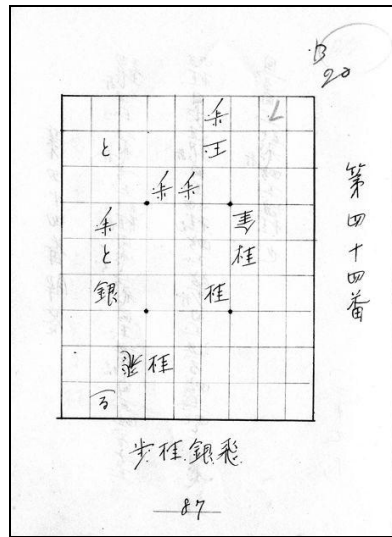
酒井には、守備駒の飛(龍)を運用する作が目につく。

原図に21歩はなく、赤鉛筆で「フ」

	と	歩	と							
銀	歩		銀							
歩			歩							
	歩	銀								
と		王	銀							
銀		歩								
王		歩								
桂			香							

第四十五番

持駒 角角金歩



第四十四番

を追加。図面右肩に「B 20」、及び径 10mm 程度の赤鉛筆の○のメモ。

82 銀成、同と、81 桂成、同玉、A 71 龍、
 同玉、62 角、81 玉、71 飛、92 玉、84 桂、
 83 玉、75 桂、93 玉、91 飛生、92 歩合、

	王	歩	銀							
		銀	歩	龍						
	桂	王	歩							
						銀				
		桂								

第四十六番

持駒 飛桂

86 角、同玉、97 角、95 玉、87 桂、94 玉、
 95 歩、83 玉、82 と、同玉、64 角、I 同
 飛、73 金、81 玉、71 銀成、同玉、61 と、
 81 玉、82 歩、91 玉、83 桂まで 21 手詰
 I 73 角合、同銀成、同飛、74 桂、83 玉、
 73 角成以下 2 手変長。
 図面右肩に「B 21」のメモ。

			角	飛	龍					
		銀								
歩	と	王	歩	歩						
	銀	歩								
桂										
桂						王				
	銀	歩	香	銀						
金		銀								

第四十七番

持駒 歩歩歩

同桂成、同と、94 歩、82 玉、71 飛成ま
 で 21 手詰
 A 93 桂、92 玉、84 桂、83 玉、72 龍、同
 と、92 角、93 玉、94 歩、84 玉、74 角
 成以下。
 図面右肩に「B 22」、及び径 10mm 程
 度の赤鉛筆の○のメモ。
 『将棋王 玉編』第 93 番と同一図。い
 ずれの図も雑誌への発表は確認されて
 いない。

64 歩、同玉、A 42 角生、65 玉、66 歩、同玉、33 角生、67 玉、68 歩、同玉、77 角生、58 玉、59 歩、67 玉、37 飛成、56 玉、47 龍、65 玉、45 龍、64 玉、55 龍、63 玉、B 64 歩、62 玉、C 72 と、同玉、52 龍、62 歩合、63 歩成、83 玉、94 銀、同玉、54 龍、85 玉、86 香、96 玉、97 銀、同玉、94 龍、87 玉、88 金、76 玉、68 桂、67 玉、64 龍まで 45 手詰

A 42 角成、65 玉、66 歩、同玉、33 馬、67 玉、61 飛成、同龍、68 歩、58 玉（68 同玉は 24 馬、58 玉、57 馬）、59 歩、68 玉、77 角成まで。

B 74 銀、同香、64 歩、62 玉、95 角以下。
 C 95 角、73 角合、同角成、同香、44 角、61 玉、72 と、同玉、52 龍以下。
 D 94 龍、95 金合、97 銀、87 玉、88 金以下。

前半は角不成、後半は龍追いになるが、肝心の角不成が成立していない。

「四十七」の番号部分を消さず右横

に「廿八」、図面右肩に「B 23」のメモ。

第四十八番

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
							王		一
						と			二
									三
						皇			四
					マ	マ			五
					馬	歩	歩	飛	六
					銀		王		七
						海	マ		八
	角			桂	銀			香	九

持駒 桂歩歩歩

A 17 飛、26 玉、B 16 飛、27 玉、38 銀、同と、28 歩、同と、39 桂、同と、28 歩、38 玉、47 馬、28 玉、18 飛、27 玉、28 歩、26 玉、48 馬、37 歩合、16 飛、25 玉、15 飛、24 玉、25 銀、同と、14 飛、23 玉、12 飛成、24 玉、14 龍まで 31 手詰
 A 38 銀、同と、17 飛、26 玉、16 飛、27 玉、28 歩以下の手順前後がある。

B 27 歩、25 玉、15 飛、24 玉、14 飛、25 玉、26 歩、同玉、38 桂、同と、16 飛、27 玉、38 銀、同玉、47 馬以下。

この図も各所に余詰。不思議なのは 89 角で、何の役割も果たしていない。

縦二本の線で「四十八」の番号部分を消して、右横に「廿九」とある。

第四十九番

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	皇			皇	角				一
海	皇		王	王			王		二
			桂	王					三
		王	金	王	歩	王	角	王	四
									五
銀		歩							六
					銀	桂			七
									八
									九

持駒 銀歩

13 歩、同龍、同角成、同玉、22 銀、14 玉、13 飛、25 玉、15 飛生、34 玉、35 飛、43 玉、33 飛生、52 玉、53 飛生、61 玉、

A 11 飛生、32 玉、31 飛生、43 玉、44 金、

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
皇		皇		歩			王	歩	一
飛				歩				飛	二
	歩			銀			歩		三
歩								角	四
			桂	皇	?			歩	五
			馬			?	?		六
									七
									八
									九

持駒 なし

うな作者不明の作品がある。酒井作かもしれない。

月報昭和6年9月に、関連のありそ

横に「四十」とある。

「四十九」の番号部分は消さず、右

完全作。徹底した飛不成追い。

玉、94歩、83玉、73龍まで35手詰

75 飛成、93玉、94歩、同玉、95銀、93

84玉、74飛生、83玉、73飛生、84玉、

51 飛生、72玉、71飛生、83玉、73飛生、

成、同龍、37金、同金、同馬、同玉、

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
馬		龍	角					と	一
		歩	歩			皇			二
	馬		王	歩			?		三
歩	歩	歩			歩			と	四
飛	と					歩			五
	歩	杏		馬			歩	香	六
								歩	七
									八
飛			銀		歩			歩	九

持駒 桂桂桂桂

第五十番

34玉、44金以下。

A 11 飛成、32玉、22歩成、43玉、41龍、

93馬、同香、82銀まで29手詰

82玉、93歩成、同銀、71歩成、同玉、

玉、73桂生、同香、82歩、71玉、72歩、

同と、41飛生、54玉、36角、同と、44

飛生、63玉、64飛、72玉、62飛生、81

集中の最長手数作。四枚の桂を斜め

D 49 同とで不詰。

C 53 成桂、51玉、52歩、61玉、21龍以下。

B 63 桂成、同歩、73金、同玉、79飛、83玉、73飛打、92玉、72飛成以下。

A 69 飛、同と、75桂、54玉、66桂、45玉、57桂、36玉、48桂、27玉、72角成、同龍、37金以下。

D 28玉、29龍まで83手詰

37玉、38銀、48玉、47龍、39玉、49龍、

玉、95飛、同金、65龍、46玉、56龍、

82成香、73玉、72龍、64玉、74龍、55

成、82玉、72成香、93玉、83金、同玉、

同玉、32龍、61玉、63香、71玉、62香

23龍、42玉、C 43歩、51玉、52成桂、

歩、31玉、51飛成、22玉、21龍、33玉、

同玉、63桂成、51玉、52飛、41玉、42

72銀成、同玉、B 63銀、61玉、62銀成、

同金、73玉、74金、82玉、83銀、71玉、

55玉、56金、64玉、65成香、同成銀、

38金、46玉、47金打、同成銀、同金、

に打ち、金が桂の利きをのぼっていく趣向である。これ以前に同一趣向はなさそうだ。

図面の「五十」を消さず、右横に「四十一」とある。

原図は次の図で、59とでなく攻方59歩、玉方68とがある。

9	8	7	6	5	4	3	2	1		
馬		驥	角					と	一	持駒
		歩	歩			皇			二	桂桂桂桂
	王		王	歩			王		三	
歩	歩	歩			歩			と	四	
歩	と					歩			五	
	歩	杏		王			歩	香	六	
								歩	七	
									八	
			王	銀		歩			九	
飛				歩		歩		歩		

以上、全50局の簡単な解説と関連事項を記してみたが、どのような感想を抱かれただろうか。

最初に断った通り、本集は習作集という位置づけがふさわしいと思う。不

完全作が多いこともその理由の一つであることは言うまでもない。ただし、個々の作品には次に掲げるように、後年月報等にそのまま発表したり、改訂して発表した図もあり、メロ程度のもものでは決していない。

瑠玉篇											
49	35	29	19	18	7	5	34	30	10	6	番号
?		友	月報	月報	月報	月報	月報	月報	月報	新誌	誌名
S	T	T	S	S	T	T	T	T	S	T	年
6	14	14	2	7	15	14	14	15	7	14	月
9	3	1	3	7	8	1	2	6	5	4	

創刊、昭和3年12月終刊）、友は「將棋之友」をあらわす。第6番は將棋新誌に、第10番、30番、34番はそのまま月報に掲載された図であり、第5番以降は改訂して掲載されたと思われる図を示している。

また、第41番は『將棋王玉編』第95番と同一図、第46番は同書第93番との関連が明らかだが、いずれも雑誌への発表は確認されていない。

酒井自身は「詰將棋圖式第一集」と書いているところから見て、作品集のつもりだったのだろう。その後、十分な内容であることを自覚して公表せず、新たに『王玉篇』を作成し少数の関係者に寄贈したのではなからうか。

その『王玉篇』があれば、さらに『瑠玉篇』の立ち位置が明確になると思われるのだが、現在は確かめる術がない。

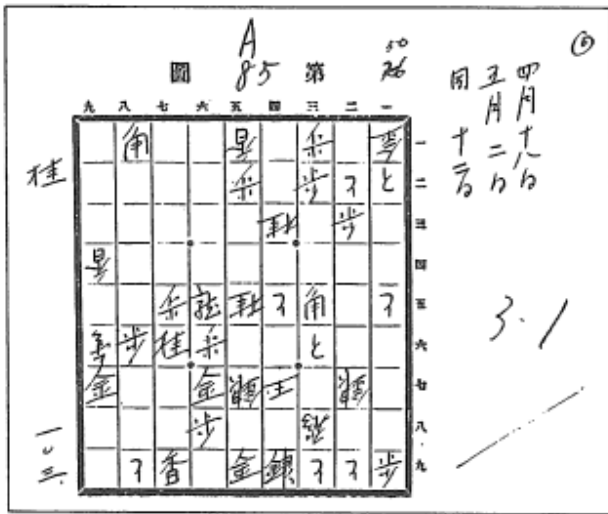
また、図面右肩のB：や番号の振り直し、○印なども気になるところで、それらの書き込みの一覧を掲げる。

新誌は「將棋新誌」（大正14年1月

10	9	8	7	5	4	3	2	1	作品番号
28	27				26	25			修正番号
	B3				B2	B1			B…
			○	○					図面○
			○	○					解答○
20	19	18	17	15	14	13	12	11	作品番号
				32	31	30		29	修正番号
				B7	B6	B5		B4	B…
									図面○
	○								解答○
30	29	28	27	25	24	23	22	21	作品番号
	34							33	修正番号
		B13	B12	B11	B10	B9	B8		B…
		○		○			○		図面○
		○		○			○		解答○
40	39	38	37	35	34	33	32	31	作品番号
	36								修正番号
	B16						B14		B…
						○		○	図面○
									解答○
50	49	48	47	45	44	43	42	41	作品番号
41	40	39	38					37	修正番号
			B23	B21	B20	B19	B18	B17	B…
					○				図面○
								○	解答○

修正番号は25から41まで、B：番号はB1からB23まで。これらの番号の振り直しやB：等が何を意味するのか、今のところ不明である。

「詰棋めいと」第10号11頁及び第20号13頁に「天馬空行」（月報昭和6年8月）の図面がある。



（「詰棋めいと」第10号より）

これは前田三桂から田邊重信に贈

られたものだそう。

田邊の『私と将棋』（昭和45年11月・近代将棋社）に昭和29年1月の前田からの私信が紹介されている。

「只一ツ酒井桂史君の詰棋丈けは手許に残存せり。其故は三桂しばしば桂史君の病状を問ひ、死後傑作五十番を選び出版を委嘱されたるに依り三桂の手許に残存せるものなり。」

遺稿は月報社より出版の予定なりしも、社主が東京に滞在中米機に爆撃せられ死亡せるに依りおジャンとなり甚る申訳なし。

其後諸方より懇望され、所々に分割配分し、今僅に存するものを清覧に供する事とせり。ご用にでも立てば使用されたし。

この時何が贈られてきたか、田邊は「酒井桂史氏の詰将棋図譜」としか書いていないが、「詰棋めいと」掲載の図面と手順がそれだったのである。さらに『昭和詰将棋秀局懐古録』上巻（昭

和30年8月・風ぐるま社）には第38番（文藝倶楽部昭和2年11月号77手詰）について「前田三桂翁より御恵興」という記述も見える。

書体は『瑠玉篇』と同じに見える。日付については、前田の「酒井先生訪問記」に「取り出して來られた桐の箱には自作の作品がギツシリ詰つてあるのに私は吃驚しました。無慮三四百もあるかと思はれた。一々着想の日から仕上げの日まで記入されてある」とある。

A 85のAとは何か。『瑠玉篇』のBとの関連を思わずにはいられないが、資料が乏しくこれ以上の追究は難しい。今後、さらに酒井自筆の図面、とりわけ『王玉篇』の所在が明らかになり、研究が進むことを期待したい。

資料を頂戴した上、細かい質問にも丁寧に答えて下さり、校正までしていただいた磯田征一氏、及び山田修司氏、岡崎正博氏に感謝申し上げます。